

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	「程嬰と公孫杵臼」（戯曲）
Author(s)	松田，武夫
Citation	龍南， 1 9 5： 5 1 - 5 8
Issue date	1925-11-28
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/8819">http://hdl.handle.net/2298/8819</a>
Right	

# 「程嬰と公孫杵臼」(戯曲)

松 田 武 夫

公孫杵臼曰。立孤與死孰難。程嬰曰。死易。立孤難可。公孫杵臼曰。趙氏先君遇子厚。子彊爲其難者。吾爲其易者。請先死。乃二人謀。取他人嬰兒負之。衣行文葆。匿山中。程嬰出。謬謂諸將軍曰。嬰不肖。不能立趙孤。誰能與我千金。吾告趙氏孤處。諸將皆喜許之。發師隨程嬰。攻公孫杵臼。杵臼謬曰。小人哉程嬰。普下宮之難不能死。與我謀。匿趙氏孤兒。今又賣我。從不能立。而忽賣之乎。抱兒呼曰。天乎。天乎。趙氏兒何罪。請活之。獨殺杵臼可也。諸將不許。遂殺杵臼與孤兒。(史記、趙世家、)

人物、

程 嬰、(趙朔の友)

公孫杵臼、(趙朔の客)

小 兒、(趙武の身代となる小兒)

屠岸賈の家臣大勢、

時、 晋景公の三年頃、

場所、 ある山中、

(正面やや上手によりて岩窟の入口あり、樹木、熊笹、岩等を背にし、全て奥深き山中なる心。秋の午后の日光が軟らかに輝

いて居る。杵臼小兒を抱きて歩んで居る。）

杵臼、泣かないで眠ておしまひ。（泣きつくける。）乳がほしいのか。よしよし、そらねんねだ。（揺り動かす。小兒泣き止む。顔をのぞきこみながら）泣きくたびれて、すやすやと眠むつて居る。（間）運命とは云へ山の奥で、乳も充分に飲まないで、暮らして行くお前が不憫でたまらない。然し何んにも知らないで、若君の身代になつて、死んで行くのは、お前にとつてほんとは幸福なのかも知れない。

（つくつくと顔を見て居ると、程嬰下手より登場）

程嬰、（杵臼を見て、なつかしそくに）杵臼殿。

杵臼、（振り返へりながら、）おお、あなたは程嬰殿。お久しぶりでした。

程嬰、かなり長いこと會ひませんでしたな。

杵臼、それにしても、若君趙武殿は。

程嬰、安心なさい。私が一生懸命養育して居りますから。

杵臼、それを聞いて私も安心しました。程嬰殿。下宮で落城を目の前にして趙夫人を、お連れしてのがれた時のことを何時も思ひ出して、何故あの時一思ひに死ななかつたかと、取りかへしのつかぬ後悔に涙を流して居ます。

程嬰、あの時只一言、奥方の胎内にある自分の子供を頼むとの趙朔殿のお言葉がなかつたならば、どうしておめおめ今迄生きのびて居られませう。

杵臼、奥方にしても見えず自分の夫を見殺にしての落城は、つらかつたことでせう。泣きながら臨月の身を運ばせて、一足一足城を去つて行かれる後姿を見て居た時は、餘りにもおいたわしい姿でした。

程嬰、御主人の理想を將來に産みつける爲には凡てを忍んで、より強く生きられた趙夫人を思ふと、私の心も勵まされます。

杵臼、あなたが、若しお生れになる子供が幸に男であるならば之を奉じ、女である場合は徐ろに死ぬるばかりだと云はれたこと

を、今も記憶して居ます。

程嬰、女でもあつたら、とても復讐することは出来ないからと思つて居た所へ、趙武殿がお生れで、どんなに私は嬉しかつたか。併しそれと同時に、どうして屠岸賈の目につかない様にしようかと、その心配で夜も眠れない程だつたのです。

杵臼、趙武殿の誕生に依り私達には、新しい大きな希望が與へられたわけですね。

程嬰、屠岸賈が感づいて夫人の家を探した時、夫人は趙武殿を袴の中に隠くして、若し趙家が亡びるならば泣け、さもないければ聲を立てないで居れと、心に念じて、觀念の眼を閉じて居られると、不思議にも趙武殿は、聲一つ立てられず、無事に助かつたと云ふことを聞いた時、運命はきつと趙家に幸すると思ひました。その時位ひ希望に満ちたことはありませんでした。眞實生き甲斐があると感じましたよ。

杵臼、私もどんなに嬉しかつたか。でもその後屠岸賈が趙武殿を探し出す様なことでもあつてはと、二人で計畫をしておいたのですけれど、あれは……

程嬰、あなたと示し合はしておいた様に、今日屠岸賈の所へ行き、私にはとても趙朔の孤兒を擁立するなどと云ふことは出来もせず、杵臼とは意見の衝突を來たしたから、若し相當の祿に有りつき、家臣にでもして下さるなら、趙武と杵臼とが居る所を教へようと申し出ると、早速案内役をおぼせつかつてやつて來たのです。あなたを敵に渡す前に二人のみで、最後のお話でしたかつたので家來共を出し抜いて、こうして來た様な次第です。

杵臼、御親切を感謝いたします。何にしても屠岸賈の奴、私達の思ふ儘にはまつたのが愉快でたまりません。では二人でしつかり芝居をうちませう。

程嬰、でもあなたにとつては、お氣の毒な悲しい芝居ですね。

杵臼、いや、大丈夫です。死後は萬事よろしく願ひ致します。

程嬰、心配は御無用です。立派に趙武殿を教育して、趙家とあなたへ御恩を報ひることを誓つて申します。

杵曰、それを聞いて安心しました。では何の心残もなく私は死んで行きませう。(小兒を見ながら)程嬰殿、何んにも知らないで身代りになるこの子の顔を、つくづく見て居ると不憫でなりません。

程嬰、趙武殿をお助けしたいばかりに、二人で仕組んだ謀計とは云へ、罪のないその子までも犠牲にしなければならぬかと思ふと、見す見す人殺をする様な氣がして、私も暗い心になります。

杵曰、何時だつたか、この子が乳が足りないのと、少しお腹をこわした爲めに、一晩中泣き通ほした時には、可愛そうで私もとうとう一緒に泣いてしまひました。趙武殿をお育てになるあなたのお骨折も一方でないことは、私にもよくわかつて居ります。程嬰、男の手一つで子供を育てて行くことは、ほんとにむづかしいものだと思ふことを、つくづく知りました。いや、何もかも皆んな趙家の爲です。私達の身を紛にした努力が、他日その實を結ぶことを唯一の慰として、安心して終りを全ふしませう。

(遠くより、この時、法良、銅羅の音聞こゆ)

杵曰、(聞き耳をたてて)程嬰殿。お聞きなさい。あれは確かに聞き覚えのある音だが、(少しあわてて)屠岸賈の手の者共がやつて來た様ですな。

程嬰、(落つかないで)段々こちらへ近づいて來る様です。いよいよ時がやつて來ましたな。

杵曰、(興奮を制しながら)死ぬる時がやつて來るのです。殺される時が……

(銅羅の音近づくと、今迄さんと輝いて居た日光が暗さを増して行く)

程嬰、銅羅の音の近づくとつれて、あなたとのお別れも近かついて來ます。それを思ふと目の奥があつくなくて、ひとりでに涙がにじんで來ます。

杵曰、もう何んにも云はないで下さい。私の胸はにえたぎる程苦しいのですから。

程嬰、杵曰殿、あなたの心はよくわかります。その言葉を一生忘れますまい。

杵曰、(苦しうに)今の私には死そのものは、そんなに恐ろしいものではないのです。こんなことなら、ずっと以前にまだ物心

がつかない中に、死んで居た方が、或ひは幸福だつたのではないかと思ふのです。

(法良、銅羅の音)

杵臼、程嬰殿。屠岸賈の手の者共が近づいて來ます。私達の計劃を實行しなければなりません。早く行つて案内して來て下さい  
程嬰、皆んな趙家の爲です。では……

(程嬰は出て行かんとして、下手に行き、立ち停まりてしばらく躊躇し、又杵臼の所に引きかへす。)

程嬰、いくら趙家の爲めにたくらんだことは云へ、あなたを敵に渡す様なことは、私にはどうしても出来ない。

杵臼、(勵ます様に)勇氣を出さねば駄目です。皆んな大恩ある趙家の爲めではありませんか。趙朔殿と御夫人の最後の遺言を忘れないで、早く皆の者をここへ案内して下さい。

(程嬰はためらひながら、涙を流して、杵臼を見て居る。法良、銅羅、家來の聲等まじりて間近かに聞こゆ。)

杵臼、早く行かなければ、程嬰殿。私は殺されるのが嬉しいのです。斬られると私からも、赤い血が流れるでせう。趙夫人の御  
自害の時は、赤い血潮でそこら中一ぱいになつたではありませんか。懷劍が咽笛を突き破つた時、眞赤な血が噴き出て、青  
白い顔を、べつとりと紅に染めたではありませんか。私はもうあの時から生きることに見放されたのです。(苦痛に耐えぬ  
表情で)程嬰殿。もう耐え切れないから云つてしまひますが、どんなにか私は趙夫人を心の中で懷しく思つて居たことであらう

程嬰、(驚ろいて)杵臼殿、それは眞實ですか。

杵臼、この場合虚偽など申しません。趙夫人の像は私の心に焼き附けられて居たのです。それは私の永遠の女像なのです。趙夫  
人の生存のみが實を云へば、私には唯一の希望だつたのです。長い間胸に疊んで居たことを、云つてしまつたので晴々しま  
した。程嬰殿。私は今やつと安心して、喜んで死んで行かれる様な氣持になりました。

程嬰、杵臼殿。

(程嬰はよろめきながら下手へ行き倒る。間近に迫れる屠岸賈の家臣等の物音に起き上り、下手の方をきつと見つむ。家臣一同

下手より登場。）

家臣一同、程嬰殿。

程嬰、皆の者油斷をするな。（杵臼を指しつゝ）あれが杵臼と趙武だ。

（杵臼は岩窟の傍の岩上に立ち身構へる。家臣は三方をかこむ）

杵臼、屠岸賈の家臣だな。お前達が血眼になつて探して居る、杵臼と趙武とは確かにこの二人だ。

程嬰、決してのがすな。

（一同ぢりぢりと身構へて杵臼にせまる。杵臼も小兒を抱いたまゝ身構へて居る。この緊張がしばらく續く）

杵臼、皆の人、一寸待つてくれ。

程嬰、この際になつて待てとは卑怯だ。

杵臼、黙れ、程嬰。卑怯とはお前のことだ。節を曲げ、無二の友を裏切つたお前の方が、よつほど卑怯だ。

程嬰、馬鹿な奴だ。この程嬰をそんなに安く見積つた、お前の方がどんなにか間が抜けて居たのだ。

杵臼、何つ。（飛び降りんとす。一同きつとなる。）

程嬰、要するにお前の目玉は節穴に過ぎなかつたのだ。

杵臼、おい程嬰。いゝ加減にしたらどうだ。趙家の程嬰と云へば誰一人知らぬことのない、忠實な男の代名詞みた様に、皆んなが思つて居たのに、殊にお前とおれとの仲は水魚の交だと云はれた程だつたのに。

程嬰、だから先刻からお前は馬鹿だと云つて居るのだ。あれ程親しくして居て、終におれ自身を見抜くことが出来なかつたとはお前も餘程間拔だ。この程嬰を生一本の忠臣などと思つたのが、そもその間違だ。世の中はお前の様にばかり云つても渡れはすまい。よく聞くがよい。人生は妥協だ。忠實そうな假面をかむつて、忠臣振つては居ても、その忠實である云ふ假面が邪魔になれば、惜し氣もなく捨てるのが程嬰だと云ふことに氣がつかかなかつたのか。それがわからなかつたお前は、充

分間抜けたと云はれる資格はある筈だ。

杵臼、それは餘りひどい云ひ方だ。

程嬰、よく聞くがよい。今いくらお前がそんなことを云つた所で、何と云つても屠岸賈殿の世の中だ、こんな山の中で氣違ひじみたことをするのを止して、屠岸賈殿のお情にすがる方が餘程賢いやり方だ。

杵臼、程嬰、お前には少しは物の條理がわかつてくれると思つて居たに、あきれ果てた卑むべき男だ。

程嬰ふん、卑むべき男か、尊敬せらるべき男は當然お前だと云ふんだな。

杵臼、(半ば歎願的に)おれはもう、これきりでお前には何も云はないから、よく聞いてくれ。ついこの前の七夕の夜に、銀河が影を投げかけて居る庭の泉の側で、二人の友情と、趙家に對する純情とは、この玉を溶かして流した様な泉の清さに等しいと、しみじみ語り合つたあのお前自身の言葉を、もう綺麗に忘れて了つたのか。屠岸賈は主家を亡ぼした。恨んでもあき足らない仇敵ではないか。それなのに掌をかへす様に、屠岸賈に屈從してその走狗となると云ふことは、少し冷靜に考へれば當然はつきりする問題ではないか。人間の持つ人間らしい心になつてもう一度考へ直ほしてくれ。これがおれのお願ひだ。程嬰、それでもまだおれの云ふことが、間違つて居るとでも云ふのか。

程嬰、お前が云ふのは恰るで夢だ。おい杵臼、人間は生きて行く爲めにはどんなことでも、仕兼ねまい動物だと云ふことをしつかり記憶しておくが好い。

杵臼、程嬰、これ程云つてもまだわからないとは、心の臓まで腐り果てた男だ。それではおれは正と義との爲めに飽まで劍を取らう。だが程嬰、おれの生命は毛頭惜しいとも思はぬが、只最後のお願だ。この趙武殿の命だけは助けてくれ。

程嬰、お前の首が地に落ちる前に趙武の首は胴とおさらばだ。趙武が目的でお前は行きがけの駄賃なのだ。

杵臼、それだけ聞けば、もう澤山だ。不忠不信の程嬰、さあ、おれの切先を受けるがよい。

(杵臼、腰の山刀を抜き岩上に身構へる。)



程嬰、（飽まで落ちついて）何だ。おとなしくする方がお前の爲めだ。そんなことをして結局は自分を傷けるばかりだ。

（程嬰、家臣に目くばせする。一同攻めよせる。杵臼は左脇に小兒を抱き、程嬰を目がけ飛び降りて切りかかる。これよりしばらく立ち廻りありて、杵臼は持てる山刀をたたき落さる。立廻りの前より西の空夕焼して紅々輝く。）

杵臼、残念だ。

（家來杵臼を縛し、舞臺の正面に引き据ゑる。）

程嬰、残念か。義の爲とかに死ぬる歡喜を精々味ふがよい。おれはもう少し此の世の飯を食つてから死にもしよう。（家來に向ひ）皆の者御苦勞だつた。（小兒を指し）あれは趙武だ。一緒に屠岸賈殿の前に連れて行くがよい。私は明日にでもお伺ひするからと傳へてもらひたい。（杵臼に向ひ）杵臼。お前の頑固がお前自身を亡ぼすと云ふことに氣が附いたらう。

杵臼、こぼれ落ちた飯粒を拾ひ食ひする、犬だ。畜生とは言葉をきくのもけがらしい。

程嬰、犬か。畜生か。おれに義理や人情があると思つて居たのか。程嬰は義理とか人情とかで拘束を受けぬ、流るる水のような男だ。それを買ひかぶつたお前などは、いい面の皮だ。おれが云ふことはよくわかつたらう。（家來に向ひ）さつさと連れて行くがよい。

（家臣は杵臼を引き立てて退場せんとする。程嬰は薄氣味悪く笑つて居る。）

程嬰、杵臼。

（後向きになつて居た杵臼はふりかへる。目と目とにて最後の別を告げる。杵臼の兩眼には涙が光る。）

程嬰、泣く男などは見たくない。早く行け。ハ、ハ、……

（調子はづれの程嬰の笑ひ聲を残して、杵臼は引きたてられて退場。程嬰の笑聲がいつの間にか低い歎歎に變つて行き、悲痛な表情となり、震へながら合掌して涙にむせびつつ、）

程嬰、杵臼殿、！

靜かに幕